84

橋田邦彦における「格医」

勝井　恵子
東京大学大学院教育学研究科／北里大学東洋医学総合研究所

1927年，東京帝国大学医学部における物理化学の講義のなかで，橋田邦彦（1882–1945）は学生にたいし，次のように問いかけている――「医者がこの頃悪くなった悪くなったと言われている，(ママ)実際に悪くなったかどうかはともかくとして，そう言われるようになったことをお互いによく考えてみなければならないのではないか」．「医者が悪くなった」という声が高まると，すぐさま「医療制度の改革」「医師法の改正」などといった議論が繰り広げられる世の風潮にたいし，橋田は反発する．そして講義時間のみならず，著作や講演のなかでもたびたび同じ問いかけを反芻しては，持論を展開するのである．

橋田の論点は，「医者が悪くなった」という風評が真実か否かという点にあるのではない．医療者の言動の良し悪しを法律によって操作し，改善を図ろうとする動きを橋田は問題視していた．というのも，そのような「医師の一部に不都合なものがあるからとて医師を皆，不徳ものとみるがごとき一部の官僚の考え方」に基づいて生み出される解決法は，医療者の個々のはたらきを全く度外視したものであり，それは何よりも「人のはたらき」を重視する橋田の「医」の理念に反するものであるからだ．たとえ医療者の不徳や不届き（すなわち「医道」の衰退）が認められたとしても，それを法律によって正そうとするのではなく，「医」の理念そのものを医療者の各自が改めて問いただし，内省することで解決を図るよう橋田は訴えるのである．このいとなみこそ，橋田のいう「格医」である．

橋田にとって「医」というものは本来正す必要のないものであり，常に「理念」としてあることが望まれるものである．しかし，「医」を実際に運用するのが人間である以上，その理念が決して揺らぐことはないとは断言できない．「正す・到る・究める」という意味を持つ「格」，「医学・医術・医道」の三要素からなる「医」，この二文字からなる「格医」とは，「医」という理念のなかに生じた不正を取り除いたり，正しいほうへと転換させたりすることで，その理念を本来あるべき姿にするといういとなみであると橋田は述べる．

では，「医」を「正す・到る・究める」ということは一体どのようなことなのか．橋田は陽明学における「正也」という言葉に着目し，その言葉が「形を変えないもの，あらねばならない姿，あらしめられている姿」という意味合いを持つものであるとした上で，「医」の「あるがままの姿」を捉えることこそ「医」を「正す・到る・究める」ことの目的であるとする．だが，「医」の正／不正を判断すること，その「あるがままの姿」を把握することは，容易に達成されるものではない．そのためには，言葉以外の，言葉に表れていないものを，言葉の中に見出すことを意味する「眼光紙背に徹す」という格言と，概念として表現されている以上の隠れた概念内容を見出すことを意味する道元の「言外の義」をめぐる考察について言及し，言葉や概念の裏にある，根源的なものの把握（すなわち「体験」）に努めるよう橋田は要請する．つまり「医」に携わる者の「体験」がいかに深化されるかが，「格医」における力点となるのだ．

「格医」は，「医」が理念的な姿へ，本来の正しい姿へと到達した時，不必要となるものであると考えられるかもしれない．だが，「格医」というものは「「医」を興す」ということへも繋がるという橋田は，「格医」によって「医」を理念的な姿へと到達させることに注力することよりも，むしろその理念的な姿へと一歩一歩近づこうとする努力や心がけといった過程そのものに価値を見出す．だからこそ，たとえ「医」とは何かということを体得していない医学生であっても，「医」というものに携わろうとする立場である限り，「医」という概念がいかなるものであるのかということを日常的に思考し，「格医」を「医行」のひとつとして実践することを求めていたのだ．